

『学会見聞記』

第20回創傷ケア学会・創傷治癒学会

The 20th Annual Symposium on Advanced Wound Care and Wound Healing Society Meeting

島村 きみ

金沢大学大学院医学系研究科  
保健学専攻看護科学領域臨床実践看護学講座  
博士前期課程2年

私はこの度、アメリカで開催された創傷の学会に参加する機会に恵まれ、大変有意義な経験をする事ができました。開催期間は今年の4月28日から5月1日までの4日間、場所はアメリカフロリダ州のタンパで開催されました。タンパは石川県出身の野球の松井選手が所属するNYヤンキースのキャンプ地として有名な都市です。私が在籍する臨床実践科学講座からは須釜淳子教授と大桑麻由美助教が、そして前の金沢大学の教授で現在東京大学大学院に在任しておられる真田弘美教授とその教室の大学院生とで参加してきました。私が今回参加した学会は“The 20th Annual Symposium on Advanced Wound Care and Wound Healing Society Meeting”で、Symposium on Advanced Wound Care (SAWC) と Wound Healing Society Meeting (WHS) という2つの学会が合同で開催されるアメリカ最大の創傷学会です。参加者は医師、ナースなどの基礎研究者から臨床家まで様々でした。今年は2,200人以上が参加されたようで、会場となったタンパコンベンションセンターは大勢の参加者と熱気で溢れていました。

この会の開催目的は3つあります。1つは創傷ケアの科学的根拠を認識し患者のケアにこの知識を適用すること、2つは創傷ケアに高度治療の試みを行うこと、3つは創傷の問題で患者のトータルケアに関与する複数の分野を評価することです。その目的通り、遺伝子解析や病態生理などの基礎的研究から器具の開発やランダム化比較試験(RCT)の結果など臨床の評価・今後の応用に向けた最新の知見が得られる充実した内容でした。それらは口演とポスター発表、シンポジウムや教育講演など、カテゴリー別にいくつかの会場に分かれて行われていました。私はポスターで“The effect of chitoooligosaccharide on the process of skin wound healing of mice”というタイトルの、キトサンオ

リゴ糖と創傷治癒との関係を研究した発表を行いました。

私が今回の学会で興味を持った研究発表は、昨年のアワードを受けて今年その発表となった“Circulating Factors in Diabetic Wound Healing”でした。血流の悪い創面に血流の良い創面をつなぐと、創傷治癒は促進するのかという疑問から生まれた研究で、DMマウスにキメラマウスの創面を合わせ、創傷治癒を追跡したものでした。結果は血流の悪い糖尿病マウス同士を合わせても創傷は治癒し、またキメラマウスよりも野生型マウスのほうが速く治癒し、期待する創傷治癒の促進は得られず、今後はさらなる研究を進めていくというものでした。それは若い研究者らしい、発想が豊かで魅力ある研究でした。私も基礎の動物実験をしているので、2匹のマウスの創面を合わせて果たしてマウス同士が反発せず創の安静を保つにはどのように管理していたのか、また倫理面ではどうなのかという疑問を持ちましたが、短いプレゼン時間だったので、その詳細までは知ることはできなかったことが残念でした。

参加して楽しかったセッションでは“Skin Problems that Look Like Ulcers, but Aren't!”で、一見褥瘡かと間違えてしまいそうな症例をスライドで提示し、どちらだと思いか会場の参加者に挙手を求め、その後ケース毎にパネリスト達がディスカッションしていくもので、臨床家の参加者も楽しみながら勉強にもなる魅力あるセッションでした。

教育講演では3つのパラダイムシフトについて話されたものがあり、興味を持ちました。方向転換していかなければならないこと、1つは統計の有意差についてでした。安易に有意差で判断してはならないこと、バイアスの関与を見落としてはならないということでした。2つはランダム化比較試験(RCT)の落とし穴です。交絡因子などは存在していないか、RCTだから信用性が高いと安易に考えてはならないということでした。そして3つはバイオフィルムの存在です。治らない創傷の多くはバイオフィルムが関与しているということでした。創傷と感染は現在とても注目の高い研究分野です。私はそれには参加していませんが、別のセッションでは感染の所見を項目別に点数化したツールなど、今後の臨床現場に導入されそうな有用なものが紹介されていたようです。

アメリカの学会に参加できたことで最新の知見を得られたことはもちろんですが、参加証に名前と共に学位を明記され、ほとんどの発表者がプレゼン資料に学位を明記しており、学位の重要性の高さを感じ、学びの大きい貴重な経験をする事ができました。

